

「渚にて」 2017：核戦争をおびき寄せる

【訳者注】第三次大戦が起これば必ず核戦争になると、ほとんどの警告者が言っているが、私はそうはならない方に賭けている。理由はかつて言った通り、核兵器は使えなくなっていると考えられるからである。<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/161028.pdf> 核保有国首脳は、互いにそれをおびにも出さないだろう。結果的に、あたかも理性が働いているかのように、戦争抑止力として働いてきたと考えられる。そう思うのは、今の自暴自棄のワシントンに、理性や自制が働く余地があるとは考えられない上に、核兵器のボタンを押すのは比較的簡単だと言われているからである。

これは、ピルジャーのように言う人々を批判するとか、嘲るとかいうことでは全くない。たとえ核兵器がなくても、米露が戦端を開けば世界全体が巻き込まれ、その荒廃は「渚にて」の結末と変わらないだろう。

4 頁上、トランプに対するクーデタ計画について書かれている箇所——彼がワシントンにとって許すことのできない敵であるのは、彼が戦争を望まないからだというところ——を、先に論じた報道の責任という観点から、よく読んでいただきたい。どうか、「トランプは、大勢が戦争へ動いているというのに、これに逆らって、戦争を望まないようです。何とわがままなファシスト大統領でしょう」などと、NHK でも、民放でも報道しないようお願いしたい。

John Pilger

August 7, 2017, Information Clearing House



米潜水艦の艦長は言う——「我々はすべて、いつかは死なねばならない。早いか遅いかの違いがあるだけだ。問題は、それがいつ来るかわからないので、常に用意ができていないことだった。だが今度だけは分かっている。そしてそれをどうすることもできない。」

彼は自分が 9 月までに死ぬだろうと言う。死ぬのに一週間ほどかかるだろう——誰も確信はもてないが。動物が最も長く生き延びる。

戦争は一カ月で終わった。アメリカ、ロシア、中国が主役だった。それが偶然によって、ま

た誤って起こったのかどうか、はっきりしなかった。勝者はいなかった。北半球が汚染され、いま生き物はいなかった。

放射能のカーテンが南方へ、オーストラリア、ニュージーランド、南米、南アフリカへ向かっていた。9月までに、最後の都市、町、そして村は滅びるだろう。北でそうだったように、ほとんどのビルは無傷であろう。そしていくつかは、電灯が最後の明滅をしているだろう。

世界はこのようにして終わる

バンという爆発でなく、クスクスンと泣くように

このT・S・エリオットの詩「虚ろな人々」の2行が、Nevil Shuteの小説 *On the Beach* の冒頭に現れ、私は泣きそうになった。この本の表紙の賛辞にもそう書いてある。

冷戦絶頂期の1959年、あまりにも多くの作家が、沈黙するか怖気づいていたときに出版されたこの本は傑作である。最初、そのスタイルは上品な古文のように思えるが、核戦争について書かれたどんな文章も、これほど真剣な警告をしたものはない。

覚えておられる方もあると思うが、これは、グレゴリー・ペックが米海軍の司令官として出てくる、白黒のハリウッド映画になっていて、彼は潜水艦をオーストラリアまで移動させ、音もなく形もない妖怪が、最後の生き物の世界の上に降りてくるのを待っている。

私は『渚にて』を先日、初めて読んだが、それを読み終えたのは、ちょうど米議会が、世界で2番目に強力な核保有国であるロシアに、経済戦争を仕掛ける法案を通過させたときだった。この狂気じみた票決には、略奪を約束すること以外に、何一つ正当化の理由はない。

この“制裁”は、ヨーロッパ、中でもロシアの天然ガスに頼る、ドイツをも狙うものであり、また、ロシアと合法的な取引をしているヨーロッパ諸国をも狙っている。連邦議会の討論と称するものにおいて、より声の大きい上院議員たちが言おうとしたのは、間違いなく、この通商禁止は、ヨーロッパに、アメリカの高価なガスを輸入するように強いるためだ、ということである。

彼らの主たる目的は戦争——本物の戦争であるようだ。これほどの極端な挑発は、そう解釈する以外にない。彼らはどうしてもそれを願っているようだが、アメリカ人民は戦争がどんなものかを、ほとんど知らない。1861 - 5の南北戦争が、彼らの本国での最後の戦争である。戦争とはアメリカが他国に出向いてするものである。

人類に対して核兵器を用いた唯一の国家である彼らは、それ以来、何十もの政府を破壊したが、その多くは民主国家であった。そして地域全体を荒廃させた。イラクにおける何百万の死は、インドシナ半島の大虐殺と比べれば、わずかである。これをレーガン大統領は“崇高な大義”と呼び、オバマ大統領はそれを修正して“例外的国民”の悲劇だと言った。彼はベトナム人のことを言っていたのではない。

昨年、ワシントンのリンカン記念堂で映画撮影をしていたとき、私は、ある国立公園事務所のガイドが、引率された十台の学校生徒に、こう講義しているのを聞いた——「よく聞きなさい。我々はベトナムで 5 万 8,000 人の若い兵士を失いました。そして彼らは君たちの自由を防衛しながら死んでいったのです。」

あつという間に、この真理は逆転された。いかなる自由も防衛されなかった。自由は破壊された。一つの農作国が侵略され、何百万もの人々が殺され、傷害者にされ、住処を追われ、毒付けにされた。6 万の侵略者は、自分で勝手に死んでいったのだった。——よく聞きなさい、本当に。

各世代にロボトミー（記憶切除）が施されている。事実が消されている。歴史の一部が切り取られ、タイムズ誌が“永遠の現在”と呼ぶものに置き換えられる。劇作家ハロルド・ピンターこれを説明して言っている——「世界的に権力を振るう者たちが、普遍的な善を目指す勢力であるかのように見せかける。これは頭のいい、ウィットィィでさえある、高度に成功した行動、“それは決して起こらなかった”という仮説の行動であった。何も起こらなかった。起こっている最中でも起こらなかった。それは問題でなかった。それには関心がなかった。」

リベラルを自称する、または意図的に“左翼”を自称する者たちは、この権力行使とその洗脳に熱心に参加している。そしてそれは今日、一つの名前「トランプ」を目の敵にしている。

トランプは狂人だ、ファシストだ、プーチンに騙されている。彼はまた「アイデンティティ政治のホルマリン漬の政治的脳」への贈り物でもある、と Luciana Bohne は面白いことを言った。人間トランプに取りつかれること——耐えているシステムの兆候やカリカチュアでなく——は、我々全体に大きな危険をおびき寄せるものである。

彼らの化石化した反ロシア・アジェンダを追求しながら、ワシントン・ポスト、BBC、ガーディアンのような、自己陶酔的メディアは、私の生涯でも記憶のないスケールの戦争売りつけを行いながら、この時代の最も重要な政治ストーリーの本質を抑圧している。

8 月 3 日、ガーディアン紙は、ロシア政府がトランプと癒着しているというタワゴトを載せ

たのとは対照的に、米大統領はロシアに対する経済戦争を宣言する議会法案を署名するよ
うに強要されたというニュースを、16 ページにひそかに埋め込んだ。

あらゆる他のトランプの署名とは違って、これはほとんど秘密に行われ、トランプ自身によ
る、これは「明らかに憲法違反」だという但し書きがつけられた。

ホワイトハウスの住人に対するクーデタ計画が進行中である。これは明らかに、彼が人間と
して嫌な奴だからではなく、彼がロシアとの戦争を望まないことを、一貫して明らかにして
きたからである。

この正常さ、または単純な実用主義を一瞬でも見せることは、戦争や監視、軍備や脅迫、ま
た極端な資本主義を土台とする一つのシステムを守っている“国家安全保障”管理者にとっ
ては、絶対に許せないことなのだ。マーティン・ルーサー・キングは彼らを、「現在、世界
で最大の暴力の供給者」と呼んだ。

彼らはロシアと中国を、ミサイルと核兵器で包囲している。彼らはネオナチを利用して、ロ
シアの“国境領土”に、ある不安定な、攻撃的な政権を据え付けている。この方法は、ヒト
ラーが侵略してきて、2,700 万の人々を死に導いたときの方法である。彼らの目標は、現代
のロシア連邦をバラバラにすることである。

これに応じて、“パートナーシップ”というのが、ウラジミール・プーチンが常に用いる言
葉である。アメリカにおける、戦争への強力な衝動を止めるものなら、どんなことでも共同
で実行しようということだった。ロシアにおける不信は今、恐怖、そしておそらくある種の
決断に変わった。ロシア政府はほとんど確実に、核による反撃を演習で試している。空襲の
演習は珍しいことではない。彼らの歴史は、準備することを教えている。

脅威は同時的である。ロシアが先で、中国が次である。アメリカは、オーストラリアとの
Talisman Sabre と名付けた、巨大な軍事演習を終えたばかりである。彼らはマラッカ海峡
と、中国の経済的生命線が通る南シナ海を、封鎖するリハーサルを行った。

米太平洋艦隊を指揮する総督は、「もし要求があれば」中国を核攻撃すると言った。彼が、
現在の不信の雰囲気の中で、公然とそんなことを言うとは、ネビル・シュートのフィクショ
ンが現実になる始まりかもしれない。

こうしたことは何一つニュースと考えられていない。一世紀前のパッシェンデールの血の
祭り（第一次大戦の西部戦線の戦い）が思い出されるが、そんな比較をする者はいない。正

直な報道は、多くのメディアで、もはや歓迎されない。偉い人と言われるおしゃべりたちが、支配している。編集者は、infotainment（情報・娯楽提供）か党の路線マネージャーになっている。かつてはサブ編集が行われたが、今は、斧を振るう常套句で切り捨てられる。これに従わないジャーナリストは、窓から捨てられる（defenestrated、即時解雇される）。

このような緊急処断には、多くの先例がある。私の映画 *The Coming War on China*（迫りくる中国との戦い）の中で、沖縄を基地とする米空軍ミサイル戦闘部隊の隊員 John Bordne が語る話として、1962年——キューバ・ミサイル危機の最中——彼と彼の同僚が、地下兵器庫の「すべてのミサイルを発射するように命じられた」。

核弾頭を装備したこれらのミサイルは、中国とロシアの両方に狙いが定められた。ある下士官がこれを疑い、この命令は最終的に取り消された——ただそれは、彼らがピストルを支給され、もしミサイル部隊の中に“発射の構えを解かない”者がいたら撃ち殺せという命令が出された後だった。

冷戦の絶頂期に、アメリカの反共ヒステリーがあまりにひどかったので、中国で公務にしていたアメリカの高官たちが、反逆のかどで解雇されたことがある。1957年——『渚にて』が書かれた年——国務省のどんな職員も、世界で最も人口の多い国の言葉を話すことができなかった。標準中国語を話す者は、非難を受けて追放されたが、それが今、ロシアを狙って通過したばかりの議会法案に反響している。

この法案は超党派のものだった。民主党と共和党の間に根本的な違いはない。“左”とか“右”という言葉は無意味である。アメリカの現代の戦争のほとんどは、保守党でなく、リベラルの民主党によって始まっている。オバマが職を離れたときまでに、彼は記録の7つの戦争を行っていた——アメリカの最長の戦争と、前例のない超法規的な、ドローンによる殺人を含めて。

昨年の、外交問題評議会の研究によれば、“不承不承のリベラル戦士”オバマの落とした爆弾は、26,171発であった——毎日続けて、時間ごとに3発となる。世界から核兵器をなくすると公約したこのノーベル平和賞受賞者は、冷戦以来、どんな大統領よりも多くの核弾頭を製造した。

トランプは比較にはならない。オバマと、その脇役のヒラリー・クリントン国務長官が一緒になって、現代国家としてのリビアを破壊し、大量の人間脱走集団をヨーロッパに送り込んだのだった。自国では、移民集団が、彼のことを“強制追放主任”と呼んでいる。

オバマの、大統領としての最後の行動の一つは、記録的な 6,180 億ドルをペンタゴンに手渡す法案に、サインしたことだった。これは、アメリカの政治のファシスト軍国主義が、舞い上がるほどに強化されたことを反映している。トランプはこれを認めている。

詳細がはっきりしていないのは、**Center for Information Analysis and Response**（情報分析と反応センター）の設立である。これは真理省というべきものだ。その役目は、“事実の公的物語”を我々に与え、我々を——もしそれを許すなら——核戦争の真の可能性に対して、準備させることである。